

小春日

谷川 葉

登場人物

梶 草太・・・四十八歳

梶 紀子・・・草太の娘・二十二歳

梶 太一・・・草太の息子・二十五歳

中原 くる美・・・草太の恋人・二十二歳

梶 めぐみ（電話）・・・草太の元妻・四十七歳

とき 去年の秋

ところ 草太のマンション（居間）

客入れBGMがF.Oして客電アウト。落ち切ったところでビートルズ「ミスター・ムーンライト」C.I.リズムの入りから緞帳C.P。(緞帳を使用しない場合は、照明E.H)舞台はマンシヨンの一室。それほどリッチとかお洒落ということもないのだが、こざっぱりとじていて仲々いい感じの部屋である。テレビ、PC、ダイニングテーブルなどが置かれている。正面奥に对面キッチン。下手側に玄関があるが見えない。ビートルズをBGMレベルにFDする。

晩秋の夕ぐれ。部屋の明かりはもう灯っている。キッチンでは梶草太がパパの休日2といった風情で夕食の準備をしている。食材を刻む、フライパンを返す、鍋のふたを上げて味見する、また食器をテーブルに並べたり、買ってきたらしい切り花を花瓶に生けるなど、妙に手際よく、しかも鼻歌まじりで実に楽しそうなのだ。この様子は少したっぷり見せておきたい。開演すると客席においしそうな匂い(例えばデミグラスソースの匂いとか・・・)が流れるとベストだが、これは無理かな。小ぶりのダイニングテーブルにはワイングラスが二個と、フォークや取り皿、調味料入れなどがあり、明らかに二人分の食事の準備中である。

BGMがF.Oだね。ジャンボーンと、ドアチャイムの音。

草太 おっ？早かったな。はいよー……。

いそいそと下袖の玄関に客を迎えに行く草太。

と……おや？下手が何か騒がしい。

(紀子) こんにちはー

(草太) 紀子！どうしたんだおまえ？

(紀子) どうもしないよ。陣中見舞い。お父さん今日誕生日でしょ？一人じゃ淋

しいっしょ。だからほら、ね？……邪魔しまーす！

紀子を先に二人が入ってくる。

紀子 うわー、いいところじゃん！

草太 ってかおまえ、普通連絡してから来るだろうっての……。わざわざ札幌から来て、いなかったらどうすんだよ。

紀子 いいじゃんいいじゃん、お父さん居ただし。

紀子、緞帳ラインにあると思われるベランダの窓に走り寄る。紀子の顔には
んのり夕日が映える。

紀子 あーっ、夕焼けきれい！パノラマウィンドウって感じ？十階だもんねー。駅がすぐそこ！樽前山がばっちりだし、あっちには海も見えるんだあ！……ベランダも広ーい！夏はここに椅子出してビール飲むんだな？好きだもんねー、そういう

の。。。ふうん、まあ、煙突が真正面つてのが少しあれだけど、王子製紙でしょ？あれ。まあ、苫小牧っぽくていいよね。。。

へえー、結構おしゃれじゃーん、きれいにしてるし。。。お父さん苫小牧でちやーんと暮らしてるんだねー。なんか安心したー。ちよっとうらやましいくらい
の一人暮らしだ。心配して損しちゃった。

草太 なーに言ってる。父さんは大丈夫に決まってるだろ。

紀子 へーえ？。。。何もなかったあのお父さんがねえ。。。

草太 いや、そりゃ、家事をしなかったのは母さんのテリトリーを尊重してたからだろ？

紀子 ふくふん。。。

草太 。。。で、母さんは？元気なのか。

紀子 うん、元気。春から児童援助ホームまかされちゃったでしょ？忙しい忙しいって言いながら張り切って働いてるよ。ボランティアでやってた頃とはぜんぜん雰囲気違うもん。札幌児童援助ホームの所長だからね。

。。。ってかお父さん、別れた妻でもやっぱり気になるもんなの？

草太 ばか、そんなんじゃないよ。ただ元気かって訊いただけじゃないか。。。ふうん、そっか、出世して張り切ってるか。。。

紀子 うん、そう。。。はああ、うちの両親はそれぞれの道を選び、どちらも幸せに暮らしましたとさ。。。って感じ。

草太 なんだよそれ。。。

紀子 べつにい。。。

草太 それより紀子のほうはどうなんだ。

紀子 あたし？見てのとおりだよ。元気げんき。

草太 そっか。・・・仕事は？

紀子 うん、相変わらず・・・。図書館司書だったって市役所の契約職員でしょ？あたし子供たちにも人気あるし、要領いいから年上の司書さんたちにも上手に甘えてよくしてもらってる。

草太 (笑) そっか、要領いい、か・・・。確かにな。

紀子 なーにようー(笑)。・・・あ、そうだ、お誕生ケーキ持ってきてあげたよ。

草太 あ・・・、う、うん、ありがとう。すまん・・・。(と、すでにあつたケーキの箱を移動するなど、意識する仕草)・・・太一は？

紀子 え？お兄ちゃん？お兄ちゃんも元気だよ・・・あ！・・・ってか、・・・おーっ！
5
なんかいい匂いするー！

と、キッチンに入って鍋を覗き込んだりしていた紀子が、二人分の用意がされているテーブルに気づく。

紀子 あれ？あれあれ？・・・誰か来るの？

草太 ああ、・・・うん、いや、・・・ってほら、まあ、誕生日、だからさ・・・

紀子 ん？・・・あ、あーっ！・・・それってもしかしてもしかして、女の人おお???

草太 あ、いや、まあその、あれだ、まあ女の人、ではあるんだけど・・・

紀子 へえーっ、そうなんだ、やっぱりー！でも、家に来るってことはさ、・・・カノジヨ、

だよね?・・・えーっ、お父さん、カノジヨいるんだ。ふうん、・・・やるなあ!・・・
どんなひと?ねえ、どんなひとなの?

草太 いや、どんなひとっていうかだな・・・

紀子 あれ?うっそ、まさかもう一緒に暮らしちゃってるとかなの?

紀子があらためて部屋を見回す。

草太 いや、いやいや、それはないよ、うん、もちろん・・・まあ、今日はたまたま遊びに来るっていうかだな・・・。

紀子 ふーん、そうなんだ・・・ん?・・・ってかさ、その人、ほんとにお父さんのカノジヨなの?カノジヨってわかるよね。カレシとカノジヨっていうか、つまわり、恋人のことだよ?

草太 わかるよそれぐらい・・・。ああ、うん、まあ、そう、だな。世間一般ではまあ、カノジヨって言うかもな・・・

紀子 世間一般で言うとかって、なによそれ・・・頼りないなあ、なんだか・・・あ、あれっ?・・・お父さんひよっとして、あたしに見栄張ってない?・・・お父さんに彼女ってさあ・・・、やっぱりありえない?

草太 ありえないことはないだろうよ、失礼な。俺だってねおまえ、まだまだ現役というかだな、はたから見ればちゃんとしてんだよ。

紀子 ふーん、まあ、ねえ・・・。あ、でもさ、一つ言っておくけど、あたしやお兄ちゃんはまだ大人なんだから気を遣うことないんだからね。不倫じゃないんだし、

恋愛でも何でもして思い切り生きてくのがいいと思うよ。うんうん。あたしだってお父さんが元気で幸せにやってくれたほうが絶対いいんだし。

草太 いや、うん、まあね・・・そりゃそうだ・・・いや、ただなあ・・・あゝ、いや・・・、うゝん・・・、まいったな・・・

紀子 うん？何言ってるの？

草太 いや、実はその、だな・・・、えーと、そのカノジヨなんだがな・・・

言いよども草太。そこにまたピンポーン・・・

草太&紀子 あ！

紀子 来た？

草太 うん・・・来た、かな・・・

紀子 どうしよ！あたし・・・あたし、隠れる？

草太 ばか、何言ってるんだよ。(玄関へ向かう)

紀子 えー？だって・・・

玄関で客を迎えた草太の声が聞こえてくる。

(草太) おう・・・

(くる美) や。早かったでしょ・・・あれ？誰か来てるの？

(草太) うん・・・実は、な・・・

(くる美) え？誰？

(草太) いや、それがだな・・・

(くる美) エー？何？どうしたの？・・・

下手からいぶかしげな表情のくる美が登場する。

ところがなんとー登場してきた草太の恋人、くる美は紀子と同じ二十二歳の女の子なのである。

くる美 ……お邪魔します・・・あれ？

紀子 あ！・・・ども・・・え？

くる美 あ？どうも・・・って、え？あのう・・・？

紀子 はあ？・・・っていうか、えくくく？うつそお・・・！

くる美 え？なに？・・・草ちゃんこの人・・・ダレ？

草太 ……いや、待て、違うんだ・・・いや、違わないか・・・まいったな・・・

あの、えーと、・・・これ・・・俺の娘・・・

くる美 ……は？え？あれ？うそ。だって子どもは息子さんだけだって言ってたよ？

草太 うん、・・・いや実は、・・・いるんだ、娘も。本当は男と女がひとりずつ・・・

あゝ、えっと、だな・・・、これが娘の紀子・・・で、こちら、中原くる美さん。

紀子 あ、ど、どうも、梶紀子です・・・

くる美 あ、あの、中原くる美です。はじめまして・・・

紀子 あ、はじめまして・・・ってか、くる美さん・・・若っ！ってか、若すぎっ！・・・

あーっ、・・・そっか、それでお父さんいろいろ隠してたんだな？

草太 いや別に、か、隠してるわけじゃないよ。人聞きの悪い・・・。

紀子 でも、言えなかったんでしょ？

草太 いや、まあだから、近いうちに、ってさ……

紀子 隠してると同じじゃーん！ふん……自分の娘と同じような歳のカノジヨか

あ……。へ……え？

草太 あ？ああ、いや……、まあ確かにそんなことも、なくはないんだけど……、

だなあ……

紀子 ねえ、くる美さんってトシいくつなんですか？あー……ってか、それよりほんとにほんとにお父さんのカノジヨさんなんですか？なんか全然信じられないんですよね、あたし……

くる美 (笑) そっかなー、やっぱり見えないかなー？

紀子 うん、見えない。

くる美 (笑) ……そっかー、そっだよなー……でも私としては、ちゃんと真面目にお付き合いさせてもらってるつもりなんですけどね……。ね？

草太 う、うん。もちろんそっだよ……。あ……っていうか、おれが付き合ってもらっているんだけど……

くる美 (笑) ……で、歳は二十二、です……

紀子 え……っ！あたしと一緒だ……。

くる美 え？うそ！ほんとに？……あ、でも私早生まれだから……

紀子 え……っ、あたしも早生まれ！

くる美 あ、じゃうさぎ年の？

紀子 うん、うさぎ年の、早生まれ！……ってことは学年も一緒なんだ……。ちょ

つと、お父さん・・・？

草太 あ、ああ・・・そ、そうだね・・・一緒だねえ・・・

紀子 一緒だねえ・・・じゃないって・・・

くる美 はあー、・・・まあ確かに、そりやあなかなか言えないよねえ、草ちゃん・・・
娘さんがいて、私と全く同じ歳だなんてさ・・・

草太 いや、まあなんというか・・・だな、・・・すまん。

くる美 親子に近いものはあると思ってたけど、同い年の娘さんかあ・・・。つくづく面
白いなあ、私達・・・。ね？草ちゃん・・・(笑)

紀子 ……草ちゃん・・・ソウチャン？ふーん・・・。うん、まあでも、面白いつち
やあ、面白いか・・・。ね？お父さん・・・(笑)

草太 いやいや・・・、そりやおまえ・・・

紀子 あ、ねえねえ、でも、なんで？なんでこうなるわけ？どついうきっかけてこうな
るの？このお父さんと、だよ？

草太 いや、だから、それはな・・・、そりやまあ誰にだって普通にいろいろあるだろ
うよ？・・・なあ？

くる美 (笑)

紀子 だけどさあ、お父さん今日で四十八だよ？四捨五入したら五十だよ？もっかい四
捨五入したら百じゃーん！ダブルスコアどころじゃないじゃんよ！

草太 ばか、おまえ人間の歳を十の位で四捨五入するやつがあるか・・・

紀子 ねえ、ほんとうにいいの？くる美さんはそれで・・・もうちょっとしたらこのヒ
ト老人だよ？もしかしたらポケチャウかもだよ？ポケちゃって、話も通じない俳

徊老人だよ？・・・あたしならやだなー、そんな、ご近所徘徊してるカレシなんて・・・

くる美 (笑)

草太 おいおい、もうちょっとしたらってことはないだろ・・・？

紀子 ね、ね、くる美さん、そもそも論だけど、くる美さんは一体うちのお父さんのどこがいいわけなの？

くる美 (笑) え〜？・・・いや、普通だよ？・・・優しくて、まあかっこいいし・・・

紀子 プツ！

くる美 (笑)・・・それに、何より私をすごく大切に思ってくれるところかな・・・。私ね・・・、こう言っちゃうと恥ずかしいし、ちょっとばかみたいなんだけど・・・、

私、紀子さんのお父さんとなると、ホントにほんつとに楽しいのね。・・・ほら、

「心の底から楽しい人生は、曇りなき正義だ」みたいななの、誰かも言ってるじゃない？

草太 ーん？誰？

くる美 誰だったかなー、有島武郎だったっけ・・・

紀子 文豪の？

くる美 うん。・・・って嘘だけど。

紀子 え？え？

草太 嘘かよ・・・

くる美 (笑)ごめん、ごめん・・・。でも有島武郎は嘘だけど、私はわりと本気でそう思ってるの。こつこついうのを一元哲学って言うんだよって、草ちゃんが教えてくれた

んだけど、・・・あのね、・・・楽しけりゃいいってのは刹那主義みたいだけど、その時だけの刹那的な楽しさってちょっと苦い、みたいなところがあるじゃない？困ったことになるのがわかっていてるけど考えないようにする・・・、みたいなね。だからこうやってスコーンと心の底から楽しいってのとは全然別ものなの。100%楽しい生き方って、批判も否定も入る余地がないんだよね。

草太 出たね、くる美の一元哲学。

くる美 へへへ・・・

紀子 はーん・・・なんかお父さんがくる美さんを好きになった理由が分かってきた。

くる美 え？・・・そうお？

紀子 うん、くる美さんがお父さんを好きな理由は全然わからないけどね・・・。

くる美 (笑)

紀子 ……うちのお父さんって、昔っからくる美さんみたいな人が好きだよ、きつと。

くる美 え〜？どういう意味だろ・・・(笑)

紀子 くる美さんってうちのお母さんにちょっと似てるもん・・・

くる美 え〜？

草太 ば、ばか、似てないよ、ちつとも・・・

紀子 へーえ、しっかしたまげた。こんなことってあるんだなー。父親の新しい恋人が娘の私と同年かぁ。少女漫画の世界にはありそうだけど、現実には仲々ないよね・・・。もちろん、そりゃまあ、二人がいいならあたしがどうこう言うことでもないんだけどさ・・・。でも、本当に大丈夫なのかな。本当にどっちもだましたり、だまされたりしてないの？

草太 ど、どういうことだよ。

紀子 だからさ、若いカノジヨに言われて生命保険を大きくした、とか・・・

草太 おいおい、物騒なこと言うなよ。

くる美 (笑) ウケる！

紀子 もしくは「おじさんお金いっぱい持つてるんだよ」的な？

草太 いい加減にしろつての！

くる美 (笑) 大丈夫だよ、紀ちゃん心配しすぎ・・・

紀子 (くる美に) でもさ、言えないでしょ。親とかに・・・

くる美 ああ、うん、・・・今はまだ、確かに内緒にしてる・・・

紀子 でしょ？やっぱり・・・

くる美 うーん・・・、だってね、うちのお母さんなんか草ちゃんより歳下なんだよね。13

紀子 ふーん・・・、つてかさ、さつきから気になるんだけど、この人のこと普通に草ちゃんって呼ぶの？いつつも？(笑)

草太 ば、ばか、いーじゃんよ・・・

くる美 えーっ？へん？・・・そうかなあ・・・でもね、さつきの話だけど、心配いらな
いから安心して。

紀子 そうは言ってもねえ・・・

くる美 ……私ね、学生の頃ススキノのバーでピアノ弾きのバイトしてたんだけど、お
客さんの素敵な金持ちおじさんとか相手にしても、ぜーぜん平気だったんだ。
おじさん世代どころか、年上つて興味ないなーって感じだったの。なかには誘惑
してくるおじさんもいたけど、ちっともふらついたりなんかしなかったもん・・・

それなのに、今こうして草ちゃんと仲良くなってるのって、自分でもすごい不思議なんだよね・・・

紀子 へーえ・・・まあ、なんというか、精神年齢的には年上感が薄いかもね・・・

草太 !

紀子 ってか、さっきススキノって言ってたけど、くる美さん、札幌なの？

くる美 うん、短大からだけどね。家はオホーツクの田舎町。

紀子 へーえ、そうなんだ・・・。短大って？

くる美 白雪。

紀子 おく、おじよーさんなんだあ。

くる美 ううん、ちがうの。学生寮があって音楽科のあるところって白雪くらいでしょ？

札幌じゃ・・・

紀子 あー、そうかも・・・。えー？・・・ってことは、白雪の音楽科だったら、友達

行ってた！ももちゃん。一之瀬もも子。

くる美 ああーっ、一之瀬さん？歌科（うたか）の？知ってる知ってる！。クラス違った

けど共通の友達がいたから結構話したりしたよ。いい子だよな。ももちゃん・・・。

あ、じゃ、紀ちゃん、高校は青林だったの？

紀子 うん、そう。

くる美 へー、優秀なんだー。

紀子 ところがそんなことはないんだなー。あたしは完全に落ちこぼれて感じ・・・。

高校の時は文芸部に入れ込んだじゃってさー、会報っていう名目で年に二回作品集出すんだけど、その締め切り前の定期テストなんか、学年240人中240番だ

ったんだよ。

くる美 エー？本当？

紀子 うん、ほんとのホント。物理なんか0点とっちゃって……。戻ってきた解答用紙に「文芸に憂き身をやつすことなかれ」ってなんか川柳みたいの書いてあって、教科以外関係ない先生だったんだけど、心配してくれてるんだなーって、ちょっとしみりしちゃったもん。

くる美 ヘーえ……。あー、でもさ、学年人数ちようどの最下位って、だれか一人でもテスト期間に休んだら達成できないじゃない？ってことはある意味、かなりなレアナ記録だよー。

紀子 うんうん、その時あたしも思った！（笑）……。結局会報に乗せた作品もほめられなかったしな……。あ、そうだ！あたし演劇部に脚本書いたこともあるんだよ。

くる美 へえー？

紀子 ところがね、演劇部がその台本でコンクールに出てさ、コンクールだから合評会ってのがあって成績もつくんだけど、審査委員に脚本が良くないってメツタメタに言われたらしい……。くっそう。ってまあ、大した本でもなかったんだけど（笑）……。最近はね、高校の時に文芸部じゃなくて、何か違うことやってればよかったなーって思っちゃう……

くる美 ふーん……

紀子 うん……。なんていうかさ、自分では完全燃焼してたつもりだったけど、中途半端だったかなーって。

くる美 他にもやりたいことあったとか？

紀子 じゃないんだけど、・・・たとえばさ、陸上400mとかで毎日グラウンド走ってると、秒縮めることとかに熱中していたら、この中途半端感はなかったかな・・・みたいな？

くる美 走るの得意なんだ。

紀子 ぜんぜん。

くる美 えーっ？（笑）

紀子 いや、たとえばの話だからさ・・・（笑）

くる美 面白いなあ、紀ちゃん。・・・あ、でもね、文芸部の作品集ね？それ、やってるそのときは充実感あったんだよね？

紀子 うん、あの頃はそうだったんだけどさあ・・・

くる美 それなら大丈夫、後悔いらないよ、きっと。

紀子 え？どうして？

くる美 だってほら、「何であれ充実感をもって打ち込むことには、必ず絶対的な価値がある」・・・って。

紀子 ん？

くる美 えーっと・・・、トルストイ、だったかな・・・

紀子 ……嘘でしょ。

くる美 ……うん。・・・バレた？（笑）

紀子 （笑）ウケるなー、まーた自作きたよ・・・（笑）

くる美 （笑）

紀子 くる美ちゃんも相当オツカシイよねー。ああ、オカシくなきゃうちのお父さんな

んかと付き合わないか(笑)

くる美 ひどいよ、それー……。 (笑) ……でさ、紀ちゃん青林のあとは？

紀子 宮本の短期。

くる美 えー？あそこけっこう難しいでしょ？やっぱり優秀だったんじゃない。

紀子 ううん、ぜんぜん。ってか、例年はそこそこらしいんだけど、うちの時ってほら、宮本定員割れだったの覚えてない？

くる美 えー？そうだったっけか。私、音楽科しか見てなかったからなー。

紀子 いや、ほんとなんだよ。「この期は名前を漢字で書いたら合格でしたからね」なんてイヤミ言う教授もいたくらいだったんだから……

くる美 へーえ、そうだったんだ(笑) ……ってかさあ、ほんとに紀ちゃん同い年なんだねー……。 って、あれ？私いつの間にか紀ちゃんって呼んでる！(笑)

紀子 (笑) ほんとだー。いつの間にか呼ばれてるー(笑) ……ねえ、じゃ、あたしはなんて呼べばいいの？うん？あー！「父のカノジョさん」とか？(笑)

くる美 やーだ、やめてよー、もう……。 (笑)

紀子 ごめんごめん。(笑)

くる美 ……でも、うーん、父親のカノジョかー。そうだよねー……。勝手だけど、私だったらお父さんに若い恋人とかいたら正直ちよつといやかもなー。ましてその人が私と同い年なら「いい加減にしてよもう……。」「ってなっちゃうかも……。

紀ちゃんはほんとに平気なの？ほんととは少し嫌だったりするんじゃない？

紀子 大丈夫。ほんとに、ぜんぜん嫌じゃないんだな、これが……。きつとね、くる美さんのうちの方がずーっと普通だからそう感じるんじゃないかな？あたし

のうちって、昔っからみんななんか、へんなの。

くる美 へん？・・・って、そんな・・・

紀子 ううん、そうなの・・・だから、あたしもちょっとへんなんだな、きつと。だって今日、ここに来てね、お父さんにカノジヨがいるって分かったとき、嫌じゃないどころかうれしかったんだよねー・・・いくら母親とは離婚した父親だってさあ、新しい彼女が出来てることを喜ぶ娘って、これってあんまり普通じゃないんじゃないかな、多分・・・しかもさ、こんなに若いカノジヨでしょ？それでまた、おう！やるな、親父！・・・みたいな感じ？まるでちょっと自分の手柄みたいに感じちゃったりしてさ・・・

くる美 へーえ？そうなんだー・・・うーん、そうだねえ、・・・やっぱり少し変わってるかもな・・・まあ、私にとってはラッキーなんだけど・・・

紀子 ああ、そくだよねー。「お父さん、いやらしい！」とか言う娘だったらー波乱だもんねー。ね？（草太に。笑）

くる美 （笑）そうそう、「お父さん、フケツ！」なんて・・・。ね？（草太に。笑）

草太 お、おまえたちね・・・

紀子 で、ほら、くる美ちゃんのことなんて呼ぶ？

くる美 ああ、私はね、友達にはキヨンって呼ばれてるんだ。

紀子 キヨン？

くる美 うん。元はくる美きよんだったの。それがくるきよん、もっと短くしてキヨンって感じ？だからキヨン子とか、キヨンちゃんとか・・・

紀子 キヨン子！（笑）それはウケるねー。じゃ、キヨンちゃんで・・・で、キヨンち

やん今は苦小牧で仕事なの？

くる美 うん。ピアノ教室の先生。って言っても楽器屋さんの契約社員だけど。．．．あ、それでね、ピアノ教室の発表会で、草ちゃんが働いてる市民文化ホールに行つて．．．

紀子 出会った！

くる美 うん．．．。えー、でもさ紀ちゃん、舞台上で仕事してる草ちゃんってかっこいいんだよー？知らないでしょ。

紀子 うっそだー、信じらんない。

くる美 一度見せてあげたい。ほんとなんだから。．．．紀ちゃん、．．．惚れるよ？

紀子 うっそさ、わく、キモい！トリハダ！（笑）．．．あ、すみません．．．（笑）

くる美 （笑）．．．じゃ、紀ちゃんの仕事は？

紀子 あたしはね、卒業してから札幌の児童図書館で司書さんしてる。．．．って言うても、あたしも市役所の契約職員なんだけどね。

くる美 ふくん、そうなんだあ。結局本が好きなんだねー。．．．あー、でも、役所とかでもさ、やっぱり契約さんっていろいろキビしいんですよ？

紀子 うん、けーっこう露骨だよ。ほんともう、正職員とゼーんぜん違うもんねー、待遇。ボーナス時期とかあったまに来ちゃう。

くる美 私もそう。ねえ．．．

紀子 あー、思い出したらまた腹立ってきちゃった．．．（笑）

話の中にまったく入っていけずにうろうろしていた草太に、ふと二人が気づく。

くる美 うん？

紀子 あら？お父さん？

くる美 あは、ごめんねー。つい盛り上がっちゃった。草ちゃんほったらかしだったねー。

紀子 だってキヨンちゃん面白いんだもん。(笑)

くる美 いやいや、紀ちゃんだってかなり面白いよ。(笑)

紀子 あー、(草太に)ごめんごめん……

草太 いや、……そ、そんなあやまることじゃないし……

くる美 あーねえねえ草ちゃん、せっかく紀ちゃんが来てくれたんだから、今夜は三人で

食事しようよ。いいでしょ？

草太 おう、そうだな、食ってればいいさ。

くる美 紀ちゃん、時間は大丈夫だよね？

紀子 あーやばっ！……って、……いや、……あの、えーと……

草太 どうした？

くる美 どうしたの？何か用事？

紀子 いやその……、実は……

そこでまた、ピンポーン！

草太&くる美 ん？

紀子 あー、きつとお兄ちゃん……。

と、紀子が下手の玄関に向かう。

くる美 え？お兄さん？

草太 なーんだ、太一も来てたのか……。

……と、またしても玄関方向が騒がしい。

(紀子) ごめん！

(太一) お前何やってんだよ。まずは私が偵察、とか言って入ってっただっきり出

てこないし、真っ暗になっちゃうし、そりゃ心配するだろうよ。

(紀子) だってさぁ……、それよかお兄ちゃん、もう、びーっくりだよ！ ほ 21

らほら、この靴見てよ。

(太一) え？いたのか、女！親父にも……

(紀子) しいっ！聞こえるって、そんな言い方して……

草太 なーに二人でこそこそやってるんだ？……太一、ほら、入ってこいよ。

太一登場。紀子も続いて入ってくる。

太一 お邪魔します……

草太 おう、久しぶり。

太一 うん・・・(くる美を見つけ) うん？

くる美 はじめまして。中原くる美です。

太一 え？あ、はじめまして・・・息子の太一です。。。親父がお世話になってます。。。
つて、え？紀子、この人？

紀子 ねー？びーっくりでしょ？お父さんのカノジヨさんで、キヨンちゃん。なんとあたしと同年なんだよ。。。もう友達になっちゃった。

太一 え？・・・えーっ？？

草太 おう、まあ、そんなことになってな。はっはっはっ・・・

太一 そんなことだったって・・・

くる美 太一さんのことは聞いてましたよ。保育士さんなんですってね。保育園の先生なんでしょう？

太一 え、ええ、まあ・・・

くる美 お母さんを尊敬しているから、お母さんの専門分野と同じ子供にかかわる仕事に就いたって聞いてますよ。

太一 いやあ、そういうわけでもないんですけど。。。でも、子供ってめっちゃめっちゃかわいいですよね・・・

紀子 お父さんに似てめっちゃ年下好きとか？

くる美 えー？それってロリコン・・・

草太 おいおい、ロリコンはいかんど。

太一 何言ってますか！ふざけないでくださいよ。。。つてか、父さんに言われたくないよ。

くる美 あら、私は子供じゃない・・・歳は離れてるけど・・・

紀子 そう、あたしたちは大人だよ？歳はめーっちゃ離れてるけど・・・

草太 おいおい・・・

太一 いやまあ、そうだけど・・・ってか、俺は、保育園児に性的な欲望なんか感じてないからね！

草太 ばーか、冗談だろ、ムキになるやつがあるか。

紀子 もう、子供なんだから。

太一 なあにい！

草太 ころころ・・・

くる美 仲良いいんですね。楽しい家族だったんだろうな、きつと。

紀子 そうかなあ。うん、まあ楽しいっちゃ楽しい家だったよね、お兄ちゃん。

太一・・・

紀子 くん？

草太・・・どうした？

太一・・・紀子、まだ言っていないんだろう？・・・母さんのこと・・・

紀子 え？・・・ああ、うん・・・

草太 くん？

太一・・・あのさ、父さん・・・、実はさ・・・

草太・・・さあて、ようやく二人揃ってわざわざ苦小牧まで来た本題だな・・・で、
母さんがどうした？

太一 うん、・・・実はね・・・

紀子 ……お母さんね、カレシ出来たって。

草太 ほうー？

太一 ……うん、そうなんだ。で、またそれを母さん何時ものごとくあっけらかんと
言うからさ……

紀子 「お母さんね、恋人出来ちゃったー」

草太 そっか……。あいつらしいな。

紀子 それでね、結婚するって……

草太 ほう……

紀子 いいの？

草太 いいも悪いもお前、それは母さんの人生だろ？

太一 でもさ、俺たちとしてはまだ何となく父さんが戻ってくるような気がしてたから、
24 帰る場所がなくなったら父さん可哀そう……。って言うか……

紀子 うん、そう。それであたしお母さんに言ったのね、お父さんどう思うかなって。
そしたら母さんがね、「お父さんのことは心配ないと思うよ。もしかしたら若い力
ノジヨでもいたりして……」って……

草太 え？調べたのかな、あいつ……

紀子 えー？まさかあ……。でもお母さんって、なんか千里眼的なところがあるよね。
しかも現実にごうだし……

草太 まあ俺のことはいいとして……。ふうん……。そっかあ。母さんが再婚かあ……。
それで二人して俺を心配して、わざわざ様子を見に来てくれたってわけか……

紀子 うん、実はまあ、そういう感じだったの……。でも！ところがですよ？苫小牧で

一人寂しくしょぼくれている父親を発見するはずだったのに、こーんなかわいいキ
ヨンちゃんと楽しくやってる父さんを見つけてしまったと……。うん！これは
やっぱりおめでたいことだね！……。ま、わずかに不健全ではあるけど……

草太 いやいや……

くる美 そーんなー……

紀子 うそうそ。完璧だよ。これからはキヨンちゃんに「お母さん」って甘えようっ
と。

くる美 えーっ？……

紀子 (笑)

太一 ……しっかし、なんだかなあ……

草太 うん？どうした……？

太一 俺は……、俺はね、……。俺はやっぱり、……。いやだな。

紀子 ん？何が？

太一 こんなのやっぱり普通じゃないよ。五十のオヤジと……

草太 四十八だけだな……

太一 約五十のオヤジと二十歳そこそこの女の子ってまともか？

紀子 えー？いいじゃん、別に普通じゃなかったって……

太一 うちの親も妹もへんすぎる……。くる美さん……。で、いいんですよね？

くる美 はい……。

太一 くる美さんは、本当にこれでいいんですか？

くる美 ……うーん、確かにうちは普通のうちだから……。草ちゃん連れて行ったら

大騒ぎにはなるかも……です。うちのお父さんって草ちゃんより2つ上なんだけど、町役場で助役なんですよね……。だから「助役んとこの娘がよー……」って町の人たちのウワサにもなるだろうし……。そんな感じで、まあ、親とかには申し訳ない気持ちはありますよね、正直なところ……

草太 うーん、やっぱりそうだよなあ……。すまん……

太一 だろ？

くる美 ううん、あやまらないで。それでも草ちゃんといたいと思ったのは私なんだから……。それにね、私は三人姉妹の末っ子だから、少しくらい変わってても大丈夫じゃないかなって……

太一 これは少しくらいじゃないと思うんだけど……

くる美 うーん……

草太 たしかに……

紀子 お兄ちゃんさあ、いいんじゃない？犯罪ってわけじゃないんだから……

太一 ……紀子……？

紀子 なあに？

太一 …お前、おふくろの相手って、誰だか知ってるのか？

紀子 えー？知らないよ？もちろん。援助ホームの人だってことしか知らない。お金持ちのやさしいおじさまだったらいいなー、なんて思ってたけど……。あれ？お兄ちゃん、誰だか知ってるの？

太一 マ・サ・ル。

紀子 え？

太一 マサルだよ。マサル君！近藤マサル！

紀子 !・・・

草太 あっ?・・・ひよっとして、よくうちに遊びに来てた、あの、ちっちゃかった近藤君か?

太一 ……そ。あのマサル・・・

紀子 まさか・・・ってか、えーっ!うっそー……。それ、ほんとなの?

太一 ……冗談でこんなこと言えるかよ・・・

紀子 ひゃー、・・・こりゃあ、たまげたぞい・・・

くる美 ちっちゃいマサル君、って誰?

草太 ……うん、・・・太一の小学校にあがるまえからの幼馴染みでな、すごく小さ

かったんだ、小学生のころは・・・

くる美 ええっ?・・・ってことは・・・

紀子 ……お母さんの相手はお兄ちゃんと同じ年・・・

くる美 へーえー!

草太 ……でも本当なのか?だって、お前、結婚するって、さっき・・・

太一 本当なんだよ、これが……。本当に、母さんとマサルが結婚するって話なんだ。・・・

実は昨夜、マサルから電話が来た・・・

紀子 何て?

太一 ……言うのが遅くなって悪かったけど、実は、うちの母さんと結婚しようと思

ってる・・・って・・・

紀子 ひえっ

草太 ……近藤君って、今はどうしてるんだ？

太一 うん、……あいつも俺と一緒に保育の学校に進んだのは知ってるでしょ？……
そして今は、母さんが所長の児童援助ホームの職員……

くる美 じゃあ、ある意味職場恋愛でもあるんだ……

紀子 あー、……そっぴや毎朝迎えに来て、マサルくんの車で仲良く一緒に通勤してる
わ、あの人たち……

草太 ほう……

紀子 えくく、けどあたし、マサル君のことお父さんなんて呼べない。

太一 そこかよつ。

紀子 だって……。

草太 くつくつく……(やがて大笑)。そうかあ……、母さん、マサル君と結婚かあ。
28

紀子 確かに笑うしかないかもね……

太一 いやいや、笑い事じゃないって……。ほんとにどうなってんだよ、うちの親は……。
別れてからそれぞれが自分の子供と同じ歳の相手と付き合うとか、再婚するとか、

普通そんなのありえないって……。まあ最悪、ではないにしても……。俺は、
いやだよ。こんなのやっぱりまともじゃないって……

くる美 ……なんか、ごめんなさい……

太一 ……

紀子 ううん、違うよ、違う違うーキョンちゃんは悪くない。お兄ちゃんがわがままな
だけだよ……。お父さんが一人ぼっちにならないでさ、それどころかこんな幸せ
そうにしていられるのって、キョンちゃんのおかげなんだよ……。だからね、あ

たしはキヨンちゃんには感謝しかない・・・

太一 いや、それは俺もそう思うよ。そうなんだけどな・・・、でも・・・

紀子 お兄ちゃん、だめだって。そんなのつまらないよ。せつかく生まれて来てさ、いつかみんな死んじゃうんだよ？みんな、全員が死んじゃうんだよ？・・・だったから自分が一番いいって思うように生きてくしかないじゃん！お父さんもお母さんも、あたしたちだって・・・。ねえ、キヨンちゃんもそう思うでしょ？

くる美 うん、それはまあ、思う・・・

太一 いや、だからそれはな、俺だってそれはそう思うよ。思うんだけど・・・、けど俺、・・・やっぱり駄目なんだ・・・。マサルが母さんとセックスしてるんだって思ったらたまらないんだよ！

紀子 やだ！変態！

太一 だけど、父さんとくる美さんだってやってんだぞ？

草太 おいおい・・・

太一 俺、やなんだよ、そういうの・・・。そんな歳の差、アブノーマルじゃん・・・。アニマルセックスじゃん・・・

草太 いや、アニマルはお前いくらなんでも・・・

紀子 お兄ちゃんが一番まともだって思ってたのに・・・

くる美 ちょっと、ショック・・・

太一 でもね、さっきくる美さんだって言ってたでしょ？家族には申し訳ないって・・・くる美 それは、そうだけど・・・

紀子 あのさ、お兄ちゃんさあ、それ、カノジョがないからなんじゃない？欲求不満

なんだよきつと。

草太 ふむ・・・

太一 ふむじゃない！

くる美 ……私はね、うちのひとたちにも、太一さんにも、理解は無理かもしれないけど、でも認めて許してほしいなって、そんなふうに思ってるんだけど・・・

太一 それは無理だよ、くる美さん……。特にくる美さんのお父さんなんかにしたらさ……。だって、自分に娘がいたとしてだよ？育てて大きくなって、結婚相手連れてきたと思ったらそれが自分と同じような歳のオヤジなわけでしょ？・・・もう、憤懣やるかたなしだよ。暴れちゃうよ、俺ならきつと・・・

紀子 お兄ちゃん、カノジョカノジョ・・・

太一 うるさい！・・・ねえ、くる美さん、まだ遅くないから、考え直そうよ。それがみんなのため、ひいては自分のためだって。。。だからそう。。。、そうだ！くる美さん、俺と付き合おう！

くる美 ええっ？

草太 何言ってるんだお前・・・

太一 息子の俺なら何とかオヤジの代役やれるよ、きつと。ね？そうしよう。DNAを信じよう。俺と付き合ってください！お願いします！

くる美 ……

紀子 父親の恋人を譲り受けるなんて、そっちのほうがよっぽどアブノーマルだっぢゅの・・・

くる美 太一さん、ごめんなさい。・・・私、草ちゃんだけを愛してるの！

草太 くーちゃん！

くる美 草ちゃん！

紀子 ひえくくくっ！

と、この時紀子の携帯電話が鳴る。電話の相手の声はスピーカーから流れる。

母めぐみ役はカゲマイクを使うが、電話に近い音質で拡声されるよう調整すること。また、電話のめぐみ役も台詞は暗記し、舞台上の役者とのギャップをなくすよう努めたい。

紀子 あ、電話・・・お母さんだ！・・・もしもし？

(めぐみ) もしもし紀子？あんた今どこにいるの？

紀子 え？あー、えーと・・・

(めぐみ) 苦小牧でしょ。

紀子 どうしてわかるの？

(めぐみ) 太一もいるんですよ？

紀子 だから何で分かるのよ。

(めぐみ) そりゃああたしの子供たちだもん。

紀子 えー？何よそれー・・・

(めぐみ) それより紀子、あんたこれからお姉ちゃんになるからね。

紀子 はあ？・・・ええっ？それ、どういうこと？

(めぐみ) お母さんたちね、まだ小さい子どもを養子にとることにしたの。

紀子 え?・・・エーーっ?

太一 どうした?

紀子 お母さんたち、養子をとるんだって・・・

太一 はあぁーーー?

(めぐみ) もしもし?紀子?紀子?

紀子 あー、はいはい・・・

(めぐみ) 太一、そこにいるんでしょう?

紀子 うん。

(めぐみ) ちょっと代わって。

紀子 うん・・・お兄ちゃん、代わってだって。

電話を受け取る太一。

太一 もしもし?

(めぐみ) ああ、太一。今紀子から聞いたでしょ?養子を育てることにしたって。

太一 うん・・・、ってかそれ、本気なの?・・・。

(めぐみ) 本気よ、もちろん。冗談でこんなこと言わないわよ・・・まあそんなわけだからね、お母さんももうひと頑張りしようと思ってる。

太一・・・

(めぐみ) ま、それでね、子どものためにも籍を入れなきゃってことになったのよ。で、

お母さんは照れくさくて嫌なんだけど、マサル君が簡単でいいから結婚式を

あげたいって・・・

太一 け、結婚式い？

(めぐみ) いや、だからお母さんはあれなんだけど、まあ、マサル君がそう言うならそれもいいかなってお母さんも思ってね、でもさ、ほらせつかくなら楽しいやつがいいよねって二人で調べてるうちにね、・・・つい勢いついちゃったって
というか、月末の日曜日にホテル予約しちゃって、明日その打合せなのよ。

太一 え、えっっ？月末ってあと2週間しかないじゃん・・・

(めぐみ) ところがね？今日夕方になってホームに面倒なケースが入っちゃったもんだからマサル君、明日無理そうなの。で、代わりに太一に付き合ってもらおうってことになったんだけど、その前に決めておかなきゃならないこととかあるし、太一と紀子にちゃんと報告もしたいしで、もう、お母さんパニック。

太一 こっちのほうがよくばどパニックだって・・・

(めぐみ) お父さん、元気そうだった？

太一 うん。

(めぐみ) そっちは大丈夫だろうから、ね、だから紀子連れてすぐに札幌帰ってらっしやい。今夜中に済ませたいこといっぱいあるのよ。ね？わかった？

太一 う、うん・・・てかさ、実は父さんの方もさ・・・

(めぐみ) いい、いい、帰ってからゆっくり聞く。とにかくすぐに帰ってきて。

紀子 今度は何だった？

太一 月末の日曜はホテルでパニックだからすぐに札幌帰って来いって。

紀子・・・何言ってるかさっぱりわからないよ。(電話をとりあげ)もしもし・・・お母

ん？

(めぐみ) あ、紀子？今、太一にも言ったんだけど、すぐに帰ってきてちょうだい。

紀子 ホテルがパニックって何なのよ？

(めぐみ) 何でもいいの。帰ったら説明する。まあ、しかし気の利かない子たちだね。お父さんのことだから、せっかくのお誕生日にワインかなんか用意してロマンチックに二人でやるつもりだったんでしょ？きつと。・・・邪魔しないの。

紀子 あ、確かにワイングラス・・・

(めぐみ) でもね、お母さんがパニックってのも本当なの。ばたばた動き出す前に挨拶したいって、今夜遅くなるはずだけど来るのよ、マサル君。・・・お母さんの相手がマサル君だって聞いているでしょ？

紀子 うん・・・、ついさっきね・・・でも挨拶って言ったってあたし・・・

(めぐみ) 親しき仲にも礼儀ありって言うでしょ？

紀子 礼儀って言うより、常識からもほど遠いって・・・

(めぐみ) なあに？

紀子 いや、別に……。あ、お母さん、お父さんとは話さなくなっているの？電話代わる？

(めぐみ) ううん、いいのいいの。よろしく伝えといて。あ、そうだ、孫ができる心算でいてって、そう伝えて頂戴。お願いね。

紀子 孫ってっ言ったってさあ・・・

草太 さん？

(めぐみ) じゃ、頼んだわよ。気をつけて帰ってきてね。ご飯作っておくから。

紀子 うん。・・・わかった。

(めぐみ) あ！紀子？

紀子 何？

(めぐみ) あんた、弟と妹と、双子のお姉ちゃんだからしっかりね！

紀子 !・・・ちよつと待って！双子って・・・？ねえちよつと、お母さん・・・！

めぐみの笑い声とともに電話が切れる。

紀子 切れた・・・はあー・・・つたく。

草太 孫って何の話だ？

紀子 お母さんがお父さんにね、孫ができる心算でいてって。

太一 何だそれ？

くる美 圧倒的に面白いお母さんみたい・・・

紀子 かなり強烈だよ？キヨンちゃんといい勝負・・・

くる美 え〜？

紀子 お兄ちゃん？

太一 ん？

紀子 双子らしいよ、養子・・・

太一 うん、そうらしいな・・・

紀子 もう、事態は動き始めてることだよね・・・

太一 ああ……、もう止まらねえな……父さんたちだつて……

くる美 ごめんね……

太一 いや、こつちこそ……

草太 ……紀子？

紀子 うん？

草太 孫の話だけだな、母さんに、わかつたつて、お父さんがそう言つてたつて伝えといてくれ。

太一 え？何でわかつちゃうの？

紀子 (草太に) うん、わかつた。言つとく。

太一 何でわかるんだよ、え？紀子……

紀子 何でも……。さて、引き上げるか。

くる美 えーっ？ほんとに帰っちゃうの？

紀子 うん、ごめんねキヨンちゃん、お騒がせして。さ、アニキ、帰るよ。

くる美 少しだけでもつまんで行かない？

太一 (紀子に) どうする？

紀子 帰るの。気が利かない子だねえ。うちにマサル君も来るんだつて。パニックは本当だよ。

太一 はあ？……何かお前、おふくろに似て来てないか？

紀子 いいからいいから……。じゃ、お邪魔しました。お父さん元気でね。キヨンち

ゃん、ごめんね、せわしくて。またゆっくり会おうね。お父さんをよろしくだよ。

なんせ子供っぽいところあるからね……。笑

くる美 (笑) うん、知ってる・・・でも、そこもまた悪くないところかなー

紀子 あーらら、よかったね、お父さん。

草太 お前たちなあ・・・

紀子 ちゃんとカノジヨを大切にするんだよ？

草太 わ、わかってるよ。

にぎやかに玄関に移動を始める。

太一 俺はついていけないよ・・・ったく・・・じゃあ父さん、くる美さん、とにかく、またね。

草太 おう、気をつけて帰れな。

くる美 また遊びに来て。

(紀子) うん、ありがとう。お父さんのケータイにあたしのアドレス入ってるから。

くる美 わかった。メールするね。

(太一) お邪魔しました。

(草太) クルマ、とばすなよ。

(太一) わかってる。

(くる美) さようなら。またね。

(紀子) うん、さようなら・・・。

草太とくる美が戻ってくる。

くる美 ふう……、行っちゃったね……

草太 うん……。せわしい奴らだったな。

くる美 でも……会えてよかった。紀ちゃんとはもう友達だし……。奥さんにも会ってみたいくなっちゃったな……。ねえ？私も早くうちのお父さんやお姉ちゃんたちと草ちゃんを紹介したい。

草太 あー、うん、そうだな……。体裁悪いけど、このままってわけにはいかないわけだし……。

くる美 びーっくりするだろうなあ、うちのみんな。

草太 びっくりというより怒るんじゃないか？こんなの連れてったら……。こわいなあ……。殴られるかな、やっぱり……

くる美 それはないと思うけど(笑)……。でも草ちゃんさ、お母さんとかお姉ちゃんたちには意外と受けがいい気もするんだよね……

草太 そ、そうかなあ。そうは思えないんだけど……

くる美 大丈夫……。ってか、まあ、なるようになるし……

草太 度胸いいよな、くーちゃんは……

くる美 てへへ……

草太 さあてと、じゃあ、始めよっか。

くる美 うん、始めよう。おなかへこへこだよ。(キッチンに回り)もうほとんど出来てるんだね。よし、じゃまず、ケーキ飾ってムード出しちゃおっか……

草太 うん。ワインも開けよう……。ちょっと味見もしてな……。あとはまあ、出来た

順に出せばいいんだし……

くる美 うん、私も手伝う！……ああっ、草ちゃん、ワインの味見は少しだけだよ……。

あれー？ケーキ二個ある！

草太 あ、忘れてた。あいつらも一個持ってきたから、半分持って行かせようと思ってたのに……。うーん、とりあえずこっちからにするか……

くる美 あー、おいしそー！でもさ、こんなに食べたなら太っちゃうね……

草太 少しくらい大丈夫だよ、くーちゃんは……。あ、ってか、太ったら今よりポインになるかもしれないぞ。

くる美 いやーん、草ちゃんのエッチ！（笑）

などアドリブも混ぜながら二人はいかにも仲良く席の準備をするのだが、ここはお座なりにならないように時間を使い、ていねいに見せること。

さて、用意ができて二人は席に着く。草太があらためてワインを注ぐ。

くる美 あ、ローソク入ってるよ……。よし、儀式やろう！……草ちゃん火、つけて。

草太 よし、やるか……。でも照れくさいな。もう五十だつてのに。

くる美 あら、四十八でしょ？

草太 あ、そうだった（笑）

くる美 草ちゃんったらもう……。笑……。でもまあ、あたしにとってはどっちでも同じようなもんなんだけどねー。（笑）

とか会話しながらくる美が立って行き、草太の着火を確かめてから明かりを消す（ここはもしも出来たら本火の使用が望ましいね）。照明が二人のエリアに絞られ、ケーキSUSがつく。くる美が席に戻る。向かい合った草太とくる美の顔が暗い中に浮かぶのだが・・・見よ！二人の完全無欠に幸せな表情を！役者と照明はこの絵を作ることによって手を抜いてはならない。

くる美　ねえ、草ちゃん、・・・私、やっぱり草ちゃんと二人でいるのがいちばんいいな・・・

草太　・・・ああ、俺だって・・・、くーちゃんがいてくれたら他には何もいらないよ・・・

くる美　今がしあわせ。・・・このままずっと一緒にいてね？

草太　うん、・・・。俺もね、・・・何よりもくーちゃんを大切に思ってる・・・

くる美　草ちゃん、・・・好き・・・

草太　・・・俺も・・・

オルゴールの、またはグロツケン独奏なんかの、ゆっくりした「Happy Birthday」がFIしている(音)のタイミングよりも、曲終わりをこの後の完全暗転に合わせるよう工夫する)。明かりがケーキsusのみでゆっくりF.C。

くる美　お誕生日、おめでとう。

草太　ありがとう。

くる美　来年も再来年も、一緒にお祝い、できますように・・・

